

かは、トッピングによる。

## | 彼は生きているかもしれない

雷に打たれはしたが、彼はそのとき鍋を持ち上げていた。鍋は一般に金属製である。またカレー等の煮物料理に用いられるものは多くの場合縦長であり、地面すれすれのところで持ち上げていた可能性が高い。そのため、直撃した雷の電流が人体ではなく金属製の鍋へと集中し、そのまま地面へと流れることで、感電死を免れていてもおかしくはない。その場合、彼はきっと生きているだろう。なお、彼が生きていようがいまいが、おそらく問題の要点に影響はないだろうというのが、学会での主な結論となった。

以上である。学会では他にも多数の解釈が連ねられたが、そのほとんどが酒の席の戯言であること<sup>13)</sup>と、参加者のほとんどがその内容を覚えていないことから、ここでは省略する。

## 12.5 問題提起③：シュレディンガーの猫まんま

自炊科学哲学をもっともよく体現していると考えられる思考実験は、やはり『シュレディンガーの猫まんま』であろう。学会での発表当時、この問題提起に魅了された学者たちによって、学会が二度目の朝を迎えた出来事のことをいまだに覚えている。それくらい、『シュレンま』<sup>14)</sup>はセンセーショナルな問題提起だったのである。それでは概要に移ろう。

箱の中に置かれた茶碗に、白米<sup>15)</sup>が一食分盛られている。白米は鰹節を振りかけられた状態のまま、箱の中に静置されている。

この箱の中には放射性物質、ガイガーカウンター、青酸ガス発生装置が仕

---

13) と言ってしまうと、もはや当学問すべてがそうだとも言えるが。

14) 略称。関係者のあいだではこう呼ばれている。

15) ここは彼とか彼女ではまずい。

掛けられている。仮に放射性物質がアルファ崩壊を起こす、つまりアルファ粒子を放出するとして、それが一時間以内に起きる確率が50%であるとする。アルファ粒子が放出されると、ガイガーカウンターが粒子を検出し、それと連動する青酸ガス発生装置が作動し、青酸ガスが箱内に放出されてしまう。で、それとは別に、茶碗の上に設置された味噌汁ぶっかけ装置も作動し、茶碗めがけて味噌汁が放出されてしまう。

さて、量子力学の説明によれば、この箱を閉めてから一時間後には、箱内の白米の状態は味噌汁がかかっていない状態<sup>16)</sup>と味噌汁がかかっている状態<sup>17)</sup>が1:1の割合で重なり合った状態になっていると解釈しなければならない。しかしそれは、通常の感覚ではまずありえないと思われる現象である。

以上のことから、猫まんまはおいしい。

おいしいものは、おいしい。

元となった『シュレディンガーの猫』は、実に複雑な解釈と議論を呼ぶものである。一般には量子力学の基盤を説明するためのたとえ話として理解されることが多いが、そもそもは量子力学が抱えていた欠陥<sup>18)</sup>を指摘するためには生まれられたものであった。一連の論争における正確な理解は非常に難しいが、数十年前に作られた思考実験が現代でもなお論争の種になっているのは、誠に驚くべきことであろう。

それに比べて、『シュレンマ』は実に単純である。なぜならこの問題は結局、おいしいものは、おいしいという結論に収束するからである。

おいしいものは、おいしい。これほどまでに簡潔な答えが他にあるだろうか？ 本当のところ、この問題には議論できる余地が多数存在する。そもそも思考実験としての意義はあるのか？ なぜ青酸ガス発生装置が必要なのか？ 地域は違えどどちらも猫まんまなのだから、これはもはや問題ではないのではないか？ 鰯節がかかっているだけでは、猫まんまとは言えないの

16) 主に東日本において、「猫まんま」と呼ばれる。

17) 主に西日本において、「猫まんま」と呼ばれる。

18) 誤解のないように言えば、観測問題にかかる十分な議論・解釈の不足。

ではないだろうか？ などである。

しかしもはや、そんなことはどうでもいい。

おいしいものは、おいしい。万事それで良いではないか。

これこそが、『シュレンマ』が抱える本質のすべてである。

## 12.6 結論

こうして導かれた結論は、自炊科学哲学の根底を大きく揺るがした。その場にいた誰もが、これまであった数々の議論はすべて些事でしかなかったことを悟った。箱の中に、50% の西まんまと、50% の東まんまが存在する。そしてそのどちらもが、おいしい。たったそれだけのことが、こんなにも神秘的なことだとは。

初めてこれが提唱された日、すべての自炊科学哲学者が言葉を失った。そして皆が祈るように目を閉じ、そのままリビングで雑魚寝した。翌日の朝には、その場にいた誰もが綺麗さっぱり学会の一部始終を忘れ、いったい何があったのか、これからどうするべきかと悩み、その後、なんか勢いで二次学会に突入することとなったのである。

筆者はいま、かつて自分で書いたはずの読みづらいメモを見ながら、当時のことを思い出している。正直なところ、本概論の執筆のために当時のメモを見返すまで、筆者はこの思考実験に関するすべての物事を忘れていた。

どうしてこんなにも素晴らしい真理を忘れていたのか？ 答えは明白である。

真理とは、常にそういうものだからだ。

いま、本文章を読まれているすべての方々に告ぐ。おいしいものは、おいしい。これは紛れもない真理である。なればこそ、この言葉を反芻し、ただ受け入れていただきたい。いまだ不十分だと言わざるをえない、自炊科学哲学という学問が、唯一、たしかに語れるのはそれだけである。

あなたはこれから、自炊科学哲学徒として歩みはじめるかもしれないし、歩みはじめないかもしれない。いずれにせよ、あなたが今日も新たな一日を